
共同研究「自然と技の生活誌」の目的と経過

安室 知

1. 共同研究

基幹共同研究「列島の生活誌における知と技の総合的研究」は、A「兆・応・禁・呪の民俗誌」（研究代表：常光徹，2007-2009年度）とB「自然と技の生活誌」（研究代表：安室知，2008-2010年度）という2つのブランチで構成されている。本報告は、「自然と技の生活誌」の研究成果をまとめたものである。

2. 研究の目的

人は「生きるための方法」として、直接的であれ間接的であれ、自然と対峙し、その関係性のなかで生業を営んできた。この自然と人との間を媒介するのが技術ということになるが、その基盤をなすのは豊に蓄積された自然をめぐる民俗知識である。

本研究において第一に着目する点は、列島における生業の技術である。生業の技術とは、道具（機械）と身体的技能および生態的技能の総和であるという観点から、とくに身体的技能と生態的技能に焦点をあわせて、民俗知識（自然知・暗黙知）の総体とその構造を明らかにしたい。

また、生業として取り上げる対象は農業、漁業、林業、狩猟、採集、都市型生業および交通・交易など多岐におよぶが、生業の技術に支えられる生活を、生業複合という高次の技術段階から列島の生業文化を捉えなおすことが、第二の着目点となる。

一般に人の生活は進化史的な理解をされてきたが、それは技術のうち道具（機械）の発達に注目した観点であり、実態は道具の進歩と身体的技能および生態的技能は反比例の関係にあるのではないかというのが、本研究の基本的なアイデアである。たとえば、近世農書や現在の生業技術からうかがうことのできる近世の生業は、身体的技能や生態的技能は、工業技術化の進んだ現代農業より高いレベルにあった可能性もある。したがって、生業技術の変遷として、近世末・昭和初期・現代に時間軸を設定して技術の連続性と非連続性を明らかにする。これが第三の着目点である。

そして「生きていく方法」としての生業活動を突き動かすのは、人の生活を包含する社会性である。従来、人の生業活動における社会的な側面はあまり重視されてこなかった。生産の場である山や海などの所有関係には生業活動との関連でとくに注目したい。つまり親族構造や社会関係などを技術の社会知としてとらえ、それらの運用が技術の効率にどのように関連するか考察することを第四の着目点としたい。

以上の研究を通して新たな生活環境史の構築を構想する。そして、それをもって、総合展示第4室（民俗）リニューアルにおける「生活世界における生業と技術」（仮称）の展示研究および展示資料収集を推進することを本研究の主な成果としたい。

3. 研究メンバー

[共同研究員]

- 池田 哲夫 新潟大学大学院
川島 秀一 リアス・アーク美術館
篠原 徹 琵琶湖博物館
高橋 美貴 東京農工大学大学院
田口 洋美 東北芸術工科大学
中井 精一 富山大学人文学部
中西僚太郎 筑波大学大学院
山下 裕作 熊本大学大学院
山本 志乃 旅の文化研究所
常光 徹 本館・研究部
西谷 大 本館・研究部
小池 淳一 本館・研究部
内田 順子 本館・研究部
松田 陸彦 本館・研究部
○吉村 郊子 本館・研究部
◎安室 知 神奈川大学大学院
(◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

[リサーチアシスタント]

- 2008年度：渡部 鮎美 総合研究大学院大学・大学院生
2009年度：岡田 翔平 神奈川大学大学院・大学院生
2010年度：高倉 健一 神奈川大学大学院・大学院生

なお、所属は本共同研究終了時、2010年度のもの

4. 研究の経過

[2008年度]

○第1回研究会

- ・テーマ：共同研究の目的と経緯
- ・日時：7月11、12日（土・日）
- ・場所：国立歴史民俗博物館
- ・研究発表
 1. 「本共同研究の目的とここに至るまでの経過について」 安室知（共同研究員）
 2. 「総合展示リニューアル（第4室民俗展示）の構想について—現在の進捗状況—」 安室知（共同研究員）

○第2回研究会

- ・テーマ：「農をめぐる技術と技」
- ・日時：10月12. 13日（日・月）
- ・場所：国立歴史民俗博物館
- ・研究発表
 1. 「土地に刻まれた記憶と歴史—溜池の呼称変化に注目して—」 安室知（共同研究員）
 2. 「近江の環境と農耕技術」 岸本誠司（ゲストスピーカー，東北芸術工科大学）
 3. 「農業技術＝農具＋わざ：農具には遺伝子がある」 河野通明（ゲストスピーカー，神奈川大学）

○第3回研究会

- ・テーマ：A・B ブランチ合同研究会および高知共同巡検調査
- ・日時：2009年2月7-9日（土・日・月）
- ・場所：高知県
- ・研究発表（高知県立歴史民俗資料館）
 1. 「市の生活誌—高知日曜市と大多喜の定期市から—」 山本志乃（共同研究員）
 2. 「葬送習俗『正月女』の伝承—高知県における葬儀社の介在—」樋口かほり（ゲストスピーカー，高知大学学生）
 3. 「潮ばかり考」梅野光興（A ブランチ共同研究員）
- ・巡検調査
 1. 高知県立歴史民俗資料館（南国市）
 2. 日曜市（高知市）
 3. 潮ばかり神事（須崎市）
 4. 宮本常一「土佐源氏」の舞台（檜原町）

[2009年度]

○第1回研究会

- ・テーマ：「移動」をめぐって
- ・日時：平成21年7月18日（土）
- ・場所：国立歴史民俗博物館
- ・研究発表
 1. 「島で生きる技としての人の移動」 松田睦彦（共同研究員）
 2. 「転飼養蜂をめぐる日本的遊動の一形態」 佐治靖（ゲストスピーカー，福島県立博物館）
 3. 「移動」に関する総合討論（共同研究メンバー全員）

○第2回研究会

- ・テーマ：A・B ブランチ合同研究会および富山・高岡の合同巡検調査
 - ・日時：平成21年12月12. 13日（土・日）
 - ・場所：富山市・高岡市
 - ・研究発表（富山大学）
-

-
1. 「クマ狩りの技術と伝承」 森 俊（ゲストスピーカー，富山県立小杉高校）
 2. 「筑波研究学園都市の民俗—開発の中の故郷と異郷—」 山下裕作（共同研究員）
 3. 「ボラ網漁の生活誌」 川島秀一（共同研究員）
- ・巡検調査（13日，高岡市）
 1. 高岡市歴史民俗資料館
 2. 菅笠作り実演参観
 3. 鯉の里資料館
 4. 菅笠の館資料館
- 第3回研究会
- ・テーマ：A・B ブランチ合同研究会および気仙沼の合同巡検調査
 - ・日時：22年2月13-15日（土-月）
 - ・場所：宮城県
 - ・研究発表（2月13日，リアス・アーク美術館）
 1. 「日本兵の亡霊とメディア報道—1960年の琉球新報記事を事例として—」 村山絵美（ゲストスピーカー，総研大学院生）
 2. 「水辺の環境と生活の変容—手賀沼のほとりで農に生きた人：増田実日記から—」 秋山笑子（ゲストスピーカー，千葉県立房総のむら）
 3. 「気仙沼の民俗」 川島秀一（共同研究員）
 - ・巡見調査（2月14.15日）
 1. 観音寺（気仙沼市）→小々汐の尾形家（気仙沼市）→水山カキ養殖場・唐桑半島（気仙沼市）
 2. 東山和紙，紙漉きの里（一関市）
 3. 正法寺（水沢市）

[2010年度]

- 第1回共同研究会
- ・テーマ：常民文化研究所と海域海民史研究
 - ・日時 2010年8月6日（金）
 - ・場所 神奈川大学および日本常民文化研究所
 - ・研究発表
 1. 「日本常民文化研究所の海民史研究—漁業制度史料の成立とその背景—」 越智信也（ゲストスピーカー，日本常民文化研究所）
 2. 「端午節の儀礼にみる水上生活者たちの所属意識—中国福建省九龍江河口に暮らす連家船漁民の事例から—」 藤川美代子（ゲストスピーカー，神奈川大学大学院生）
 3. 「20世紀前半に作成された記録類からみる『家船の村』」 厚 香苗（ゲストスピーカー，立教大学兼任講師）
 - ・巡検調査
日本常民文化研究所にて漁業制度資料（筆写稿本）の熟覧
-

○第2回共同研究会

- ・テーマ：低湿地の環境利用
- ・日時 2011年2月5、6日（土・日）
- ・場所 新潟市
- ・研究発表（新潟市歴史博物館）
 1. 「明治期の関東地方における牛馬耕の普及について—茨城県の事例を中心に—」 中西僚太郎（共同研究員）
 2. 「蒲原低湿地帯の生活技術—木造和船と稲作技術—」 岩野邦康（ゲストスピーカー、新潟市歴史博物館）
- ・巡検調査
 1. 新潟市歴史博物館
 2. 新潟市立ビュー福島潟
 3. 福島潟
 4. 新潟県立環境と人間のふれあい館（新潟水俣病資料館）
 5. 北方文化博物館（豪農の館）

5. 研究成果の概要

[2008年度]

2008年度は本共同研究に関して基本となる研究概念（生活誌、生活環境史、複合生業）について共通理解を深めるとともに、とくに農に関する技術と技について、口頭伝承、文献資料、および物質文化（民具）の各視点から検討した。その結果、農をめぐる複合生業のあり方について検討を深めることができた。また、町場の生業技術に関しては、市の商いについて、高知の日曜市を実際に巡検することで、実態に即した議論をおこなうことができた。

研究の学際性という点では、A ブランチ「兆・応・禁・呪の民俗誌」と合同して現地巡検をおこない、かつより幅広い分野の研究メンバーと議論をおこなうことができた点は有意義であったといえる。

そうした共同研究会における研究発表や巡検調査とは別に、佐渡島、屋久島、岐阜白川郷、北海道白老町、千葉大多喜町などにおいて共同研究メンバーによる個別のフィールド・ワークが進められた。この個別調査は共同研究会の目的にあわせておこなわれたものであり、その成果については順次、学会や共同研究会の場で披露される。

今年の共同研究会は、各メンバーの既存研究をもとにして、本共同研究会の趣旨にあわせて研究発表がなされたものであり、その意味で本共同研究のためのオリジナルな研究発表ではなかった。その点は、本共同研究会で予算化し、各共同研究メンバーにより進められているフィールド・ワークがすすみ次第、順次研究会にて成果報告がなされなくてはならない。

[2009年度]

2009年度は、養蜂・クマ猟・カツオ漁・低湿地開発といった具体的な海山里の生業技術を取り上げて、「生きるための技術」としての生業の複合性と、それを支える「移動」「開発」という行為

について、フィールド・データをもとに学際的に議論した。その結果、水田稲作に象徴される定着的な生業のいとなみとの対比において、「移動」「開発」という行為が人類史および日本歴史において果たした役割について実証的に明らかにすることができた。併せて、人が「移動」「開発」することによって引き起こされる社会的な葛藤（占有権や所有権の侵害といったこと）についても検討し、そうした葛藤を回避するための社会知について議論を深めることができた。

また、本年度は、従来の歴博における研究会に加え、富山・高岡と気仙沼において現地に赴いての巡見調査を2回開催することで、学際的かつ実態に即した議論を展開することができた。

ただし、上記のような研究成果を上げることができたと自己評価する一方で、本年度の中心的課題となった「移動」および「開発」の概念については十分な共通認識を形成することはできなかった。そのため、研究発表と討論が個別の事例分析的なものになりがちで、学際的に誰もが納得しうる結論には至らなかったという反省もある。本年度の反省をふまえ、来年度はこれまでの議論の中から見いだされた生業をめぐる重要な研究概念について共通認識を検討し、より有効な議論がおこなえるようにしたいと考える。

[2010年度]

2010年度は、2008年度から続く共同研究のまとめの年であり、共同研究メンバー各々は共同研究報告書に向け研究の総括をおこなった。

また、本年度の取り組みとして、海・山・里・町に展開する生業技術のうち、漁撈技術と農耕技術に焦点を当て、とくに汽水域や低湿地といった通常は人が暮らしづらいとされている環境において、人がどのように自然に向き合い、またそれを利用して暮らしを成り立たせていたかについて現地調査をもとに検討した。

具体的には、河川河口部の汽水域において船上で生活する人びとと水位変動の大きい潟湖周辺の低湿地に暮らす人びとに焦点を絞り、農耕や漁撈といった単一の生業に特化することのない複合的な生計のいとなみの実態と、汽水や低湿地という自然環境を逆手にとって多様な生業を生計維持の方途に取り込む人びとの知恵（生きるための方法）を多方面から検討することができた。また、河口部や潟湖沿岸といういわば無主の空間に注目したことで、そうした空間を利用することによって引き起こされる葛藤など社会関係を調整するための社会知についても考察することができた。

6. 「生活環境史」の提唱に向けて ―今後の展望―

自然を資源とする生業の研究は、民俗学では比較的古くからおこなわれてきたが、その多くは聞き書き調査による資料化の段階をでていない。また、他の歴史学分野においては、生態人類学のような分野を除くと、生業という研究概念自体が新しく、資料化以前の段階であるといつてよい。とくに、自然利用をめぐる民俗知識や民俗技術の研究は緒についたばかりである。それは、民俗学をはじめとする従来からの歴史学分野においては、生業研究の多くが稲作、畑作、漁撈、狩猟、商い、手工などというようにそれぞれ独立したものとして調査・記録されてきたためである。また、そうした民俗知識や民俗技術の多くが身体技法などの暗黙知として体得され継承されていくため、遺物や文献および口頭伝承に頼る従来の研究法では接近が難しかったことによる。

そうした現状を打破し、本共同研究では広義の歴史学つまり民俗学・考古学・文献史学の研究方法に加え、人びとの暮らしをありのままに記述する「生活誌」の手法を重視し、また実際の生活者に対する観察調査や参与調査を重視する研究者の参加を積極的に求めた。

その結果、従来、稲作、畑作、漁撈、狩猟、商い、手工というように技術がそれぞれ独立したものとして進められてきた生業研究を、本共同研究では複合生業論の視点に立つことで「生きてゆく方法」として総合化することができた。また、生活誌の手法を導入することで、生業をそのみで解釈せず、生活全般のなかに位置づけることが可能となった。さらには、以上の研究に歴史性を加味することで、「生活環境史」の構築を目指した。ただし、この点については本共同研究ではその端緒を開いたに過ぎず、今後のさらなる展開が求められる。

また、現代的課題にどのように寄与するかという点に関して、近年は環境倫理学や環境社会学さらにはより実学的な農学の分野において、自然との付き合い方を学ぶ方法として、在地の生活のなかで培われてきた民俗知識や民俗技術の重要性が指摘されている。そのため、本共同研究においては、社会科学など実学分野の研究者にも積極的に働きかけ共同研究メンバーとして協業を進めた。こうした取り組みにより、まだ具体的な成果としては現れてきてはいないが、現代社会に対していかに歴史科学が寄与できるかをある程度提示することができたと考える。

最後に、歴博の展示との関係でいうと、本共同研究における問題意識の発端は、共同研究「環境利用システムの多様性と生活世界」（研究代表：安室知、2001-2003年度）および「日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合的研究」（研究代表：安室知、2004-2006年度）にある。それは生活世界における生業の多様さとそれをめぐる技術・技能のあり方をさらに深く追及し、かつ歴博における民俗展示としていかに表象するかを検討するものであった。

したがって、本共同研究は2012年度に予定されている総合展示リニューアルの研究プロジェクトとも有機的な関係をもって進められた。そのため、本共同研究の成果は、第4室民俗展示における「生活世界の生業と技術」（仮称）コーナーの展示について、それを理論的に支えるものとなっている。その意味で、民俗展示「生活世界の生業と技術」は生活環境史の研究成果であり、実験的な具現の場であるといつてよい。

(神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科、国立歴史民俗博物館共同研究代表者)